都会では感じられない、つながりを実感

慶応義塾大学日野町研修

町では、都市と地方の人材交流を基本に、都会育ちの若者が田舎暮らしを体験し知り得た地域の実情を、今後、社会人として生かすことを目的に、平成24年度から慶應義塾大学（東京）と研修事業を行っています。

今年は11月20日から24日までの5日間、商学部3年の鈴木亜里沙さん（神奈川県小田原市）が来町しました。その様子をお伝えします。

5日間、地域の温かさを知る

11月20日から4泊5日の予定で来町した鈴木さんは、安達商事の移動販売、豆腐づくりやコンニャクづくりなど、地域の人たちとの交流を深めました。

まず初日は、最初のホームステイ先となった町地域おこし協力隊員の眞﨑愛さん（上菅）と、菅福元気邑で豆腐づくりを体験。午前6時に菅福食文化伝承館に集合し、地区の皆さんに教わりながら、主に完成した豆腐を容器に入れパックする作業を担当しました。作業の合間には、地区の皆さんと食事をしながら、「豆腐も野菜もみんなすごくおいしい」と驚きながら笑顔で話していました。

▲消費者ではなく、生産者側に立って

移動販売車の視察では、2トン車の小ひまわり号に1日かけて同行しました。その中で、店員が高齢者の家に声かけを行っている姿に、「ここでは移動販売が高齢者の見守りの役目も兼ねているんだ」と驚いていました。また、さまざまな地域の実情にふれたことで、この事業が中山間地の実情に合った、なくてはならないものであることを実感した様子でした。

また、4日目は、町開発センターで行われた「ミンカツフォーラムinひの」に参加。地域で活発に活動しているさまざまな民間団体からの報告に熱心に耳を傾けていました。活動報告などから浮かび上がる、地域が抱える問題や地域おこしの必要性などを肌で感じたようでした。

▲移動販売では、利用者へ気さくに話しかけていました

最終日は、早朝からオシドリグループの森田順子さんとオシドリの観察と餌付けを体験しました。何百羽ものオシドリを間近で見て、「初めて見ました。かわいかった」と感激していました。その後は、更生保護女性会の皆さんとコンニャク作りを体験。コンニャクイモをお土産に手渡され、「小田原に帰ってから、コンニャク作りに挑戦してみます」と笑顔で話しました。

はじめは緊張した様子でしたが、地域の人と気さくにふれ、人とのつながりや温かさを感じ、日野町を後にしました。

▲ミンカツフォーラムでは真剣にメモを取る姿が

▼景山町長と日野町の感想、研修を通して感じたことなど、意見交換を行いました

▲「いいコンニャクができました」と笑顔

研修を終えて～日野町での研修を終えて思うこと～

商学部
3年
鈴木亜里沙（すずきありさ）さん
（神奈川県小田原市出身）

11月20日から24日までの5日間、日野町に滞在しました。期間中は主に、豆腐づくり、移動販売、ミンカツフォーラム、コンニャク作りを体験しました。

訪問前、人口の少ない地域での生活に対し、さびしいイメージを持っていました。また、住民間の結束の強さが、外から来た者にとっては疎外感にならないかという不安もありました。

しかし、日野町の方々と交流する中で、その不安もなくなり、相対（あいたい）を大切にするこの地域での生活に心地よさを感じました。

話すことでお互いを知っていく。経歴や立場に惑わされることなく、コミュニケーションを軸にしてつくられる人間関係は、東京では感じられにくい、温かく魅力的なものでした。

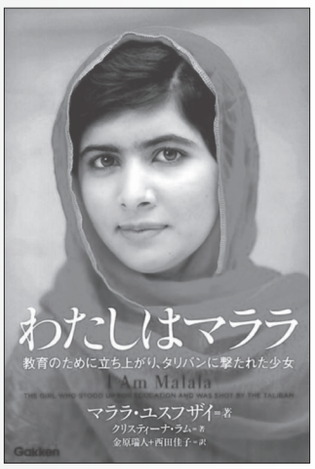
今回お話した中で、地域おこし協力隊の方の活動予定の中にはこの魅力が伝わるものがたくさんありました。日野町の地域おこし事業に、今後少しでもかかわっていけたらと考えています。

研修に携わってくださったすべての方にお礼を申し上げます。

【日野町図書館 おすすめの１冊コーナー】

読んでみならんかな～

『わたしはマララ』
マララ・ユスフザイ 著　　学研



1997年にパキスタン北部のスワート渓谷に生まれたマララ・ユスフザイさん。今や世界中で最も注目される女性のひとりとなりました。イスラム教徒が大多数を占めるパキスタンではイスラム社会特有の慣習や決まりがあり、女性は髪や顔をスカーフで隠すことはもちろん、男性のつきそいなしに出かけてはいけなかったり、そもそも子どもが生まれても女の子ならお祝いもしなかったりします。そして「女性には教育は必要ない」という考え方も多くあるのです。そんな中、学ぶことの大切さへの信念を持ち、自らも学校を建てた父のもとで育ったマララさんは「すべての女の子が教育を受けられる権利」を求めて父と活動します。しかしスワートをイスラム過激派のテロ組織・タリバンが支配するようになると、女性への教育に反対するタリバンによって脅迫を受けるようになり、2012年10月にタリバンの襲撃によって頭部を撃たれました。なんとか一命を取り留めた後でも、マララさんは怖れることなく以前にも増して教育の権利を求める活動を続けます。その活動が認められ今年、最年少でノーベル平和賞を受賞。

この本を読むと、彼女のこれまでの思いや彼女を取り巻くイスラム社会についても深く知ることができます。年齢ではなく、彼女の持つ信念や勇気に感動します。「ひとりの子ども、ひとりの教師、1冊の本、そして1本のペンが世界を変える」その言葉を私達も忘れてはならないと思います。（日野町図書館　田中　愛子）